

[人口増は沖縄のみ…そこで見た失われた昭和とは?] [迫り来る法改正の荒波-41]

<序文>

搭乗機が滑走路を徐々に減速しながら、国内線ターミナルに近づいてゆくと、右手に並んだ少し小ぶりの格納庫から、とりどりにデザインされ、配色された旅客機とは明らかに異質な、濃い鼠色の戦闘機が並んで駐機している光景が目に入り込んで来ます。そもそも此処は軍用飛行場で、民間機はその一角を借りているに過ぎないということを、いやでも実感する一瞬であり、持って行き場のない違和感に苛まれる瞬間でもあります。

二十年程も前になるでしょうか、格納庫建設に携わっていた作業者が転落事故に遭遇、その概況を現地調査し事故報告書として纏めるため、厚木基地に入ったときに感じた、名状し難い疎外感にそれは酷似していた様に思います。

豊見城道路を那覇に向かって北上すると、左手に所々、芝生で覆われた同じ形状の人工的な小さな丘が現れます。地元の話では、米軍の嘗ての弾薬庫の跡だとか。そして今は全島観光施設と化し、島の真上を那覇空港を離発着する飛行機が頻繁に飛ぶ、嘗て米軍が接收し弾薬置場として使っていた瀬長島一。

この地では、至る所で平時と有事が背中合わせに同居しており、恐らくそれが、息苦しい違和感の正体なのかも知れません。戦争の生々しい爪痕こそ見えないものの、鉄条網で遮断された生活圏と軍事施設が日常的に隣接する場所一。琉球王朝の頃から、大陸からの束縛=朝貢貿易=と薩摩藩(江戸幕府)の支配・干渉を受け、掛け値なしの自治とは縁遠い状態に耐えて来た島一。

その沖縄が、41道府県が軒並み人口減少に喘ぐ中、今年も数少ない人口増加都県の一角に食い込んでいる(本年1月1日時点で昨年比9倍の145人)のです。温暖な亜熱帯気候、紺碧の海、カラフルな色彩、豊富な海産物…。異論を差し挟む余地さえない素晴らしい特長があるから一とは云え、観光とその付帯関連事業を除くと、サトウキビと漁業の外、中核となる産業が見当たらないこの地に、宮崎と肩を並べ、今回も最低賃金で最下位(714円/時間)争いをしているこの地に、空港⇄首里城間のモノレール以外に鉄道網すらなく、本数も限られる路線バス以外、公共交通機関もないこの地に、なぜ人々はやってくるのか？

賃金水準で見ると、若者にとって魅力的な労働市場が整っているとは到底言えず、ショッピングや飲食店の店員、観光・宿泊施設の従業員、物流の配送員、バス・タクシーの乗務員等、職種も限られ、腕を磨く機会もそう多くなさそうなこの地に、それでも誘われる様にして流入してくるのは、一体どんな人々で、又どんな理由があるのか-----？ 意外なことにその答えは…